

第1回 教典って何？(I)

「教典のススメ - 教えを心の拠り所に -」 井上護夫

はじめに：心と向き合う時間を

井上護夫といいます。今日からここを、みなさんと一緒に考えたり、感じたりする場所にしたいと願っています。

私は昨年(2025年)の秋、『教典入門―理を味わい、身に行う』という本を書きました。そこでは、自分の心に教えをしっかりと治め、実行に移していくことを大切にしてきましたが、今回は、もう少し若い世代のみなさんに向けて、より分かりやすく、よりシンプルに言葉を届けたいと思い、この連載をスタートします。

「教典」と聞くと、どこか古典的で、「なんだか難しそう…」と感じる人もいるかもしれません。

でも、本当はそうではありません。教典は、ただの規則(ルール)ではなく、自分自身の信仰を確かにするためのものです。そして、これからの人生の中で、迷ったときや立ち止まったときに、自分の進むべき方向へと立ち返るための「言葉の羅針盤※」となるものです。 ※羅針盤…暗闇の中でも常に北を指し示し、進むべき航路を教えてくれるもの。ここでは、自分の「原点」を思い出させてくれる大切な指針を指します。

「教祖」と書いて「おやさま」と呼ぶこと

最初に、ひとつ大切なことをお伝えします。この道を伝えてくださったのは、中山みきというお方です。

私たちは、その方を心からお慕いし、「教祖(おやさま)」とお呼びしています。「教祖」という文字は、少し固い印象を受けるかもしれませんが、その文字の裏側にはいつも、温かな「おやさま」という響きが流れています。

この連載でも、その温もりを大切にしながら、言葉をつむいでいきたいと思います。

第1回 教典とは何か

これから「教典」について、一緒に考えていきたいと思います。教典とは『天理教教典』のことです。お道の教えを分かりやすくまとめた大切な書物です。そして、この教典には「基」となる存在があります。それが「原典」です。

01. 原典=教えのもと

原典とは、教えのもとになるものです。お道には次の三つがあります。

「おふでさき」

- 教祖が自ら筆を執られたもの。
- 明治2年から15年(教祖72歳から85歳)にかけて記されました。
- 31文字の和歌の形で、全部で1,711首あります。

「みかぐらうた」

- おつとめの地歌として、教祖が直接教えられたもの。
- 慶応2年から明治15年まで、およそ17年という歳月をかけて、手振りとともに伝えられました。

「おさしづ」

- 教祖と、教祖の理を受けた本席・飯降伊蔵先生が取り次がれたお言葉です。
- その大部分は、明治20年に教祖が現身をかくされて以降、本席によって伝えられたものです。
- 明治40年までのおよそ20年間にわたり記録され、全7巻、6,000ページを超える膨大な量に及びます。

02. 教典という「道しるべ」

こうした原典をもとにして、教祖の教えの筋道を立て、信仰の基準として一つにまとめたのが、現在の『教典』です。ここには、先人たちが書き残した教祖の御伝記や聞き書きも、大切な資料として活かされています。

教典は全部で十章あり、第一章から第五章の「教理篇」、第六章から第十章の「信仰篇」で構成されています。前篇では「教えをいかに治めるか」を、そして後篇では、それを「いかに日々の実行に移していくか」を学びます。

今回は、この十章がどのような流れで私たちの人生を導いてくれるのか、その全体を見ながら考えていきます。教典の「かたち」を知ることによって、そこから何が読み解けるのかを、ともに味わいましょう。



Happistで
読むことができます!



第1回 教典って何？(I)

「教典のスナエ - 教えを心の拠り所に -」 村上謹夫

HAPIST

今回の語り合いテーマ



まずはリラックスして、友人とこんな話から始めてみませんか？

① 「原典」と「教典」、それぞれの言葉からどんな印象を受けますか？

② これまでに、それらにまつわる思い出やエピソードはありますか？

③ あなたはいま、どちらを手にとって、ページをめくってみたいと感じますか？



Happistでも
読むことができます！

